

～毎月10日は人権を考える日～

## 戦後80年と「アンパンマン」

人権侵害の最たるものは、「戦争」「差別」である。(松本治一郎の遺訓)「戦争」は、人々のさまざまな権利と人権を奪うものである。したがって、「戦争は差別」である。

### 1 戦争(差別)をすることは、

- ・相手の様々な権利と人権を奪う。
- ・「生きる」ことの権利を奪う。

### 2 戦争(差別)をする者は、戦争(差別)をすることを正当化しようとする。

爆弾が落ちれば罪のない子どもも死んでしまう。やっぱり戦争というのは絶対やっちゃいけない。どんな理由があっても。戦争というのは、いつもいろいろ理屈をつけるわけです。「向こうが非常に悪いから正義のためにやるんだ」って言うけど、正義のための戦争なんてものはないんですよ。

(NHKアーカイブス・アナウンサー百年百話「やなせたかしさん～アンパンマンに込めた想い」)

2025年(令和7年)度前期に放送のNHK「連続テレビ小説」第112作で放送されている

「あんぱん」。絵本「アンパンマン」を生み出した高知県出身の「やなせたかし」さんとその妻「小松暢」の生涯を描いたものである。やなせたかしさんは、戦前から戦後にかけて生き抜いた人である。また、戦争体験者でもあり、最愛の弟をこの戦争で亡くされている。やなせたかしさんは、NHKの「100年インタビュー」という番組の中で、アンパンマンに込めた想いを語られていた。「正義のための戦争」なんてないこと、正義なんて逆転するということを力説されている。従軍したとき、「中国の民衆を救わなくてははいけない」と言われた。しかし、戦争が終わってみると、「自分たちは悪くて、侵略した」ことになっていた。

今、ウクライナとロシア、イスラエルとパレスチナが戦争をしている。これらの戦争をみても、どちらにも言い分がある。真実は一つのはずであるが、戦争を正当化しようとしている面もみられる。差別も同様で、差別している者は、「差別することは、しかたないことで正しい」と主張する。それは、すべて「偏見」に基づくものであることは明白なのである。作家の梯(かけはし)久美子さんは、「やなせたかしの生涯」(文春文庫)という本の中で、やなせたかしさんについて次のように書いている。

- 絵本「あんぱんまん」の中でいちばん描きたかったのは、おなかをすかせた人に食べさせて顔がなくなってしまったアンパンマンが、エネルギーを失って失速するところだった。そこには「正義を行い、人を助けようとしたら、自分も傷つくことを覚悟しなければならない」という考えがある。
- 自分の食べものをあげてしまったら、自分が飢えるかもしれない。権力に対して声をあげれば、自分の立場が不利になるかもしれない。子どもなら、いじめられている友だちをかばったら、自分がいじめの標的にされるかもしれない。それでも、信念をつらぬきたいと思ったとき、勇気がわいてくる。

と、やなせたかしさんは考えていたという。そこで、アンパンマンを、あえて「弱いヒーロー」にして、弱いものであっても勇気を出したとき、ほんとうのヒーローになれるという考えである。アンパンマンは顔がぬれたり汚れたりするとすぐパワーがなくなる。もう一度人を助けられるようになるには、新しい顔を作ってもらわなければならない。そのためにはジャムおじさんという「仲間」がいたのである。しかも、悪者のバイキンマンに対しては、悪者という「偏見」や「決めつけ」を一切しない。しかし、バイキンマンの悪い行いに対しては毅然とした態度をとるのである。

これらが、戦争を体験したやなせたかしさんの絵本「アンパンマン」に込めた想いと「正義」のとらえ方であったようだ。学校教育の人権・同和教育の中の「道徳」において、「正義」の題材が多く使われている。「正義」とは、誰に対しても差別をすることや偏見をもつことなく、公正、公平な態度で接し、正義の実現に努めること(道徳学習指導要領)とある。しかし、教師がこの「正義」をどう指導することが望ましいのだろうか。小・中学校で、「正義」を題材とした道徳の人権・同和教育の授業を参観することがあるが、子どもたちはどう考えているのだろうか。

出典：NHKアーカイブス・アナウンサー百年百話「やなせたかしさん～アンパンマンに込めた想い」  
梯(かけはし)久美子 著「やなせたかしの生涯」(文春文庫)